

## にじ色ルリー

龍郷町立円小学校 三年 横じま あやは

「もうすぐこのアマミ山がふん火するぞ。」

生まれつき未来のことが分かる力をもっているルリカケスのルリーは、森の動物たちにけわしい顔で言った。いつもは未来のことが分かっているにもかかわらず、みんなには言わない。でも、今回だけはとくべつ。だって言わないと、この島も動物たちも消えてなくなってしまうから。

「何をばかなこと言ってるの。このアマミ山ができてから何万年もたつけれど、ふん火したという話なんて聞いたことないわ。」

「お前はいつからうそつきルリーになったんだ。」  
森のみんなはルリーの話を信じなかった。

森がルリーの話でざわついているとき、ネリヤ海岸では、ケンムンの兄弟、ケントとカムンが水あびをして遊んでいた。そこに、小さなにじ色の木の実がゆらゆらと波に乗って流れてきた。

「うわあ、きれいな色。何の実だろう。おいしくくだ物の実かな。」

ケントは、きれいなにじ色の実をりよう手で持ち上げた。「そうかもしれない。植えてみようよ。」

ケントとカムンは、おいしくくだ物が食べられることを期待して、実の中のたねを植えた。

たねを植えてから一か月もたっていないのに、その大きさは、空を見上げても先が見えないほど。しかも木の回りは、手足の長いケンムンが十人で手をつないでもまだ届かない。大変な物を植えてしまったかもしれないと二人は少しこわくなった。

「こんなに大きくなってしまったら、そのうち、この島全体がこの木にやられてしまうかもしれないぞ。」

二人がそんな話をしているとき、森の方からルリーがわててとんできた。

「ケント、カムン。急いで島から出るじゅんびをしろ。山の様子がおかしい。もしにげおくれたら。な、なんだこれは。」

「大変なのはこっちもいっしょ。とんでもない物をぼくたちは植えてしまったみたい。」

とてつもなく大きな木を見たルリーは、ひっくり返りそうになった。でも、

「いや、待てよ。うんうん、なるほど、こうなっているのか。」

げんかんのとびらのように開いているうろから中に入り、様子をかくにんしたルリーは、

「これなら安心かも。みんなをよんでくる。」

と言ったかと思つたら、ものすごいスピードで山に帰つて行つた。

しばらくして、ルリーを先頭に、山じゅうの動物たちがドストドスと地面をならしながら大急ぎでやってきた。自分の話を信用しない動物たちに、ルリーは「一生かかっても食べきれないくらいのおいしい食べ物がある。」と言つてだましてつれてきたのだ。

「食べ物はこの木の中にある。さあさあ、みんな中に入つて。」

そう言つて、動物たちを木の中に入れていく。全員が入つたところで、

「ケントとカムンも中に入るんだ。」

ルリーは、外にいた二人にも声をかけ、とびらの中に入れた。そして、入り口に、草や木のえだをつめて、中かたととびらが開けられないようにふさいだ。一人外に残つたルリーは、「みんなが助かりますように。」と木の回りをぐるぐる回つてお願いをした。その直後、アマミ山が大きなさけび声をあげてばく発した。大ふん火だ。地面が大きくゆれ、きよ大な石がとびちり、空は真っ赤にそまつている。ルリーはとびつづけた。みんなを守つてくれるように、木にお願いしながらとびつづけた。すると、この大きな木の根がぐんぐんのび、地面をしつかりかかえた。そして、ひげのようなものがえだからいくつもの

び、木全体をつつむようになりみ始めた。さらに、いつの間にかにじ色の実がルリーの回りに集まり、ルリーをねつや大きな石から守つてくれたのだ。

しばらくつづいたばく発やゆれがおさまったとき、木の中にいた動物たちは大きすぎながらとびらをこじあけ、外に出てきた。ふん火が本当に起こつたことを知つた動物たちは、まずルリーを心配してさがした。もとは赤い毛だったルリーは、ふん火のねつをあびて、この木の実と同じにじ色のきれいな毛の鳥になつてえだにとまつていた。ルリーは、おだやかな表じょうでみんなを見て言つた。

「この木がみんなを守つてくれたんだ。みんなの命を助けてくれた守り神だよ。」

あれから千年。守り神になつた木はガジュマルと名づけられ、ケムムンたちのすみかとなっている。ふん火のときにとびちつた実は島のあちこちでめを出し、大きく育つている。ふしぎなことにガジュマルの木の実はルリーの元の色、赤色に変わった。ふん火で大きくなつた島は、奄美大島と名づけられた。ルリーのしそんは、にじ色のルリカケスとなつて奄美大島の中で今日も元氣にとび回っている。